

ポルカドット号探検記

フランスの浮世絵師

松本市美術館館長 小川 稔

小高いモンマルトルの丘はパリの町並みが一望できる観光名所だが、行き着くには急な坂道や階段を上らなければならない。このアイコン的存在が、キャバレ「ムーラン・ルージュ(赤い風車)」19世紀末から20世紀初頭のパリはベル・エポック(美しい時代)と呼ばれるが、その短くも華やかな時代を生きた画家・ロートレックは、この店のポスター作者として知られる。

ジャン・ルノワール監督の映画「フレンチ・カンカン」の主題歌で「貧しい人々にはきつい石の階段」と唄われたモンマルトルだが、身体にハンディを負った画家にはたしかにつらい場所でもあっただろう。しかし、彼は夜の巷に集まる踊り子、娼婦、芸術家らポヘミアンを最良の友とし、短い生涯を燃焼させた。必ずしも美女美男でなく描かれた彼らの姿には、喜怒哀楽の人生劇場が読み取れる。ポスターという街に貼り巡



〈ティヴァン・ジャポネ〉1893年リトグラフ
Courtesy of "The Firos Collection"

らされる薄い紙一枚に載せた劇場風景。ロートレックは伯爵家出身の身分であったが、アルコール漬けの不摂生な暮らしが災いし倒れ、故郷の城で母親に看取られ36歳の生涯を閉じた。

眼の前の人物、風景を鉛筆やコンテで即座に書き留める技術(デッサン)というが、彼のポスターの文字や人物たちに見られる勢いのよい太い線、細い線に私達が惹かれるのは、東洋の筆の線描を思い出させるからではないか。この「時をつかむ線」には、日本から届いた浮世絵の線描が役立つことを忘れてはならないだろう。

ART EXHIBITION GUIDE 当館学芸員 大島 武

黒い上着につば広の黒帽子、赤いマフラーを首に巻き、片手に棍棒(かんぼう)を持って不敵な笑みを浮かべる男(図1)。当時、パリのモンマルトルで人気を博したジャンソン歌手、アリストテイド・ブリュアン。自ら営んでいたキャバレに客として来ていたロートレックと親しくなり、その才能に注目した最初の人物で、自身が出演する舞台や店の宣伝用ポスターをロートレックに依頼しました。

ロートレックは、1891年から1900年までの間に約30点のポスターを制作しています。それらは今なお、19世紀末ポスターのシンボルであり続けると同時に、ロートレックの代名詞とも言えます。個人コレクションとして世界最大級と言われるアメリカのフィロス・コレクション(※)のポスターや版画は、より状態のよいものにごだわり収集されています。また、店名などの文字情報が入る前(文字のせ前)の貴重な



刷りの作品も見どころのひとつとなっています。本展で注目したいのは、コレクションの中核をなす素描(図2)の数々です。動物の動きや人物の表情などを、鉛筆やペンで描きとめた直筆の作品からリトグラフによる版画まで、画家のありのままの視線や息づかい、創作の過程を垣間見ることが出来ます。さらに、作品収集と同時に収蔵された画家直筆の手

紙や私的写真などもコレクションの特徴のひとつです。本邦初公開のフィロス・コレクションは、国内3か所を巡回して松本が最後の会場となります。本展がロートレックの魅力を再発見する機会となれば幸いです。

※フィロス・コレクションは、ギリシャ人コレクターのペリンドとポール・フィロス夫妻が、20年以上にわたり収集しているロートレック作品の個人コレクション。



Toulouse-Lautrec

Elegance of the Master of the Belle Époque

フィロス・コレクション ロートレック展 時をつかむ線



会期 / 2025年1月18日(土)~4月6日(日)
休館日 / 月曜日(ただし2/24は開館)、2/25(火)
開館時間 / 9:00~17:00(入場は16:30まで)
観覧料 / 大人1,600円、大学高校生1,100円

※中学生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料
※電子チケットによる購入は各100円引き
※20名以上の団体は各200円引き
※大学高校生は、観覧当日、学生証の提示が必要

Relay Essay

アートの中の数学

当館学芸員 北原 麻椰

私の苦手科目第1位は数学である。学生時代のテストはいつも平均点すれすれ、ひどい時は赤点をとったこともあったし、今でも数式や記号を見ただけでアレルギーをおこしてしまうほどである。そんな思いのある数学は、美術と切っても切り離せない密接な関係にある。

有名な例でいえば、ルネサンス期に活躍した芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチの作品である。《モナ・リザ》の顔の構図は人間が最も美しいと感じる比率、黄金比(約1:1.618)に基づいて描かれている。また、《最後の晩餐》の全体構図には遠近法(一点透視図法)が巧みに用いられ空間に奥行きを生み出している。

日本でも、数学的な考えが見られる作品がある。江戸時代後期に活躍した浮世絵師で、ゴッホやモネ、今期の展覧会の主役ロートレックといった西洋の芸術家たちに影響を与えた葛飾北斎その代表作の一つ富嶽三十六景《神奈川沖浪裏》である。その中に描かれた波、船、富士山の配置には黄金比が、さらに大波の渦巻きは自然界でよく見られる黄金螺旋(フィボナッチ螺旋)が使用され、全体バランスが良く、見る者に美しいと感じさせる。また、北斎は『略画早指南』という絵の手引書を書いたが、その中で建物や風景、自然物を描くときはコンパスや定規を用いて図形としてとらえて描く方法をわかりやすく伝えている。

学生のころは公式や解法を暗記ばかりで数学に対して面白さを感じる余裕はなかったが、こうして数学が美術の世界に生かされていると知り、数学を学ぶ意味や楽しさを見出せた気がする。また、数学の視点でみるという新たな鑑賞の楽しみ方を見つけた。



視る

《穂高山頂大観》

当館学芸員 原澤知也

武井真澄(本名・真澄)は、現在の長野県諏訪市出身の山岳画家である。旧制松本中学校を卒業後、東京美術学校へ進学した。1896(明治29)年に鑄金科を卒業後、小正太郎の画塾で洋画を、児玉果亭と藤森紫僊に日本画を学んだ。1900(明治33)年に母校・松本中学校の図画教師となる。教え子に増田正宗(日本画)、郷原古統(日本画)、河越虎之進(洋画)、白山卓



《穂高山頂大観》(部分)穂ヶ岳方面

吉(洋画)らがあり、中信地区の美術界に大きな影響を与えた。その後、1914(大正3)年に教職を辞して、上京し、日本画家・寺崎広業へ入門。日本山岳画協会の創立にかかわるなど、山岳画家として活躍した。

本作は、穂高山頂から見た日本アルプスの眺望を描いた作品。松本市立博物館には、画用紙をつないだ下書きが残されており、それを見ると穂高連峰の一つ涸沢岳から360度見渡した展望を描いたものとわかる。それぞれの山の上に名前が書きこまれ、現在の写真と見比べても場所が一致しており、精緻な描き込みが見取れる。

1952(昭和27)年、画業を続けていくうえで資金不足に悩んでいた武井が、本作を手放そうと考えていた時、個人の手にわたることを惜しんだ松本中学校時代の教え子たちにより「武井真澄先生後援会」が組織された。教え子たちは、資金を集めて本作を買い上げ、当時の松本市立博物館へ寄附をしたという心温まる逸話も残っている。

武井真澄は、今年生誕150周年を迎える。知る人ぞ知る山岳画家にぜひ注目してほしい。

作者…武井真澄(1875-1957)
作品名…穂高山頂大観
制作年…1942(昭和17)年
技法・材質…墨書着色・紙本
サイズ…縦68.8×横86.0・0cm

身近な ART 畳

当館学芸員 稲村 純子



機能的かつ日本文化を象徴するデザインとも言える畳。い草の香りに癒され、いつでもごろんと寝転んで寛げるという快適さも、唯一無二だろう。

畳は断熱性や保湿性に優れ、日本の気候に合った合理的な床材であるという。弾力性もあるので足触りがいいし安全。また空気を清浄化する働きがあり、香りにはリラクゼーション効果もあるそうだ。手入れも必要だが、現在は、い草を使わない畳も登場し、縁のない畳などスタイリッシュなデザインも出てきて、時代に合わせて日本人の生活を彩っている。

中国から伝来した技術が多い中、畳の製造は日本固有の伝統文化であるという。歴史は古く、奈良時代の古事記に登場しており、現存する最古のものは、正倉院にある聖武天皇が使用した「御床畳」と呼ばれる畳で、ベッドのようなものの上に敷かれていたとされる。平安時代に入り、貴族の邸宅が「寝殿造」の建築様式になると、板の間の所々に畳が置かれるようになり、鎌倉時代以降「書院造」になると、部屋全体に敷かれるようになった。畳が一般に普及していったのは江戸時代中期以降のことである。

身近にあるアートを考えたとき、畳の美しさが浮かんだ。整然と編み込まれた「い草」の列、畳縁のアクセント。少し前ならどこの家にも見られた畳は、あまりにも身近な存在で、伝統の技が日常に溶け込んでいる。

Information

■ ホームページがリニューアル

当館のホームページが、約10年ぶりに生まれ変わります。全体のデザインの一斉、スマートフォンやパソコンなどデバイスに合わせた画面・文字サイズ等の最適化、多言語対応はもちろんのこと、何より利用者の方が見やすく、わかりやすく、そして“美術館に行きたい!”と思っただけのようなホームページを目指し、目下作業中です。

公開は2025年2月から。どうぞお楽しみに!

■ コレクション展示観覧料改定のお知らせ

2025(令和7)年4月1日からコレクション展示観覧料が変わります。

区分	個人		団体
	電子チケット	紙チケット	
一般	700円	800円	630円
大学生等	350円	400円	310円

※新たに高校生以下が無料となります

Workshop report



2024. 10.27 お話+ミニワークショップ ものとの対話 保存修復のしごと

コンサバター(保存修復師)の森尾さゆりさんをお迎えして、作品の保存修復についてのお話や、修復体験を行いました。前半は、森尾さんが実際に使用している材料や道具、また修復時の写真などを見せていただきながら、コンサバターになったきっかけ、これまでに携わった仕事など、具体的なお話をお聞きしました。後半の修復体験では、竹串に少量の脱脂綿を巻き付けて作品クリーニング用の綿棒を作り、森尾さんの用意したキットを使ってクリーニングを体験したほか、石膏の接着にも挑戦。普段なかなかできない体験に、皆さん終始興味津々な様子でした。



2024. 11.23

「香取秀真展」関連プログラム 「香取秀真展」関連プログラム 鑄金に挑戦! 金属を溶かしてオリジナルチャームをつくらう

「香取秀真展」関連プログラムとして、鑄金家の本山ひろ子さんを講師に迎え、午前と午後の2回、鑄金体験を実施しました。

まず始めに、コウイカの骨を削って鑄型を制作。コウイカの骨は少しの力で削れてしまうため、皆さん苦戦しながらも思い思いの形に彫っていました。鑄型が出来上がると、そこへピューター(錫等の金属による合金)を流し込みます。5分ほど待ち、型から作品を取り出してヤスリで磨くとオリジナルの金属チャームが完成。「鑄金」と聞くとどこか難しいイメージを抱いてしまいがちですが、お子さんから大人まで、参加者全員が笑顔で楽しく体験していました。

